

アイヌ口碑伝説等により伝承された大規模災害の検証と 現在の防災・減災対策への適用性に関する研究

北海道大学大学院農学研究院特任教授 南 哲行

I. はじめに

災害・減災対策を検討する上で過去の災害履歴は最も基本的かつ重要な情報であり、一般的には都道府県や市町村の災害史、国の気象災害報告等の資料が用いられる。特に大規模な災害を対象にした場合には発生頻度が低いことから明治以前の記録も重要な情報である。このことは、東日本大震災と869年の貞観地震の記録との類似性の指摘のみならず、平成25年10月に伊豆大島で発生した大規模な土砂災害と類似する災害が1590年代の文禄年間にも記録されていること等からも示唆される。

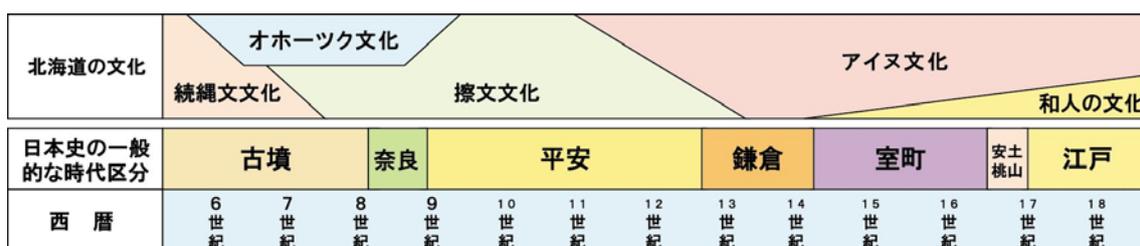


図 I - 1 北海道と日本の歴史文化

しかしながら北海道については、本州とは異なる独自の歴史文化の変遷を遂げたという背景から明治以前の災害記録が乏しい。一方、北海道に先住するアイヌの人々は、独自の言語、宗教や文化を有する先住民族であり、文字は持たないがユーカラに代表される豊富な神話伝説を有し、また地名としてもその土地の自然的特徴や生活との関わりに由来する呼称が多く残されている。

そこで本研究では、金田一京助氏を始めとするアイヌ語・アイヌ文化の専門的な研究者がとりまとめた地名及び伝承に関する既存文献・資料から、災害に関係すると考えられるアイヌ語地名及び大規模災害の履歴との関係が推測される伝承を抽出するとともに、現在の防災・減災対策への適応性に関して考察を行った。

Ⅱ. 災害に関係するアイヌ語地名

1 調査方法

アイヌの方々は、土地の自然環境と密接な生活を営んでおり、地名によりその土地に関する情報を共有していたと考えられる。特に河川は食料・物資の調達や交通路として利用されており、地形上の特性のみならず利用上必要な情報が織り込まれたと考えられる。

ただし、ある場所について複数の地名を持つ場合や、同じ地名でも複数の解釈が考えられる場合もあるため、本調査では、主に金田一京助氏に師事してアイヌ語地名を研究した山田秀三氏の著書より抽出を行った。その結果、災害に関係すると考えられる地名は道内各地に見られることがわかった。その主な例を以下に示す。

2 調査結果

(1) ピ、サツ（砂礫の流出）

石を示すピ、シュマや、乾いた砂礫原を示すサツという言葉を含む地名等は、土砂や砂礫の流出が多く洪水や土石流などの土砂災害が起こりやすい土地（河川）を示すと考えられる。

なお、山田はその著書の中で、登別市のサトオカシベツ川について以下の様に述べており、地名の意味や由来に関する防災上の重要性を認識していたと考えられる。

「上流部が札内原野の火山灰地で、平常水がながれていないので、サトカシペツ（sat-okashpet 乾いている・岡志別川）といわれたものらしい。

下流部でも平常わずかな水が流れているだけであるが、上流部で土建工事で表土を剥いだためか、先日（昭和 58 年）の集中豪雨で鉄砲水が多量の土砂を流し、下流部は大損害を受けた。地名の語義を知っていて管理されていたならば、と嘆じたのであった。」

【例】

- ポロ・ピ・ナイ（大きな・石・沢）：幌美内[千歳市]
- ピタル・ランケ（石・川原・下る）：ビタタヌンケ川[えりも町]
- ピ・ピ・ルィ（石・石・はなはだしい）：ベベルイ川[上富良野町]
- シュマ・リ・ナイ（石・多い・川、石・流れる・川）：朱鞠内[幌加内町]
- ピ・サン・ペツ（石・流れ出る・川）：毘砂別[石狩市浜益区]
- ピ・ウシ（石・多い）：比石川[檜山郡]
- ペ・ルプネ・イ（水・大きい）：歴舟川[広尾町]
- サツ・ポロ・ペツ（乾いた・大きい・川）：豊平川[札幌市]
- サツ・ピ・ナイ（乾いた・石・川）：札比内[月形町ほか]
- サツ・ナイ（乾いた・川）：札内川[帯広市ほか]
- サツ・フミ（乾いた・音のない）：札富美川[湧別町]

(2) サン、シノロ (大水・洪水)

大水が出るという意味を持つサン・シノロという言葉を含む地名が見られる。

【例】

- サン・ナイ (出る・川) : 珊内[鶴居村ほか] 鉄砲水の出る川
- サンケ・ペツ (浜の方に出す・川) 三毛別川[羽幌町]
- シノ・オロ (本当に水のあるところ) : 篠路[札幌市]

(3) トイ、ペルケ (がけ崩れ・山腹崩壊)

崩れる (トイ)、裂ける (ペルケ) という言葉を含む地名は、がけ崩れや山腹崩壊が起こりやすい土地 (崖地・山) であると考えられる

【例】

- トイ・パケ (崩れた・出岬) : 問牧[枝幸町]
- トイ・ピラ (崩れた・崖) : 豊平[札幌市]
- トイ・カム・ペツ (土砂のかぶさる川) : 問寒別[幌延町]
- ペルケ・ヌプリ (裂けた・山) : 美留和山[弟子屈町]

(4) トウ・コタン (廃村)

捨てた村を示すトウ・コタンは、災害や疫病など何らかの理由により居住しなく (できなく) なった土地である。

ただし、ト・コタン (沼・村)、トウ・コタン (二つの・村) を示す地名である可能性もある。

【例】

- トウ・コタン (捨てた・村) : 床丹[佐呂間湖周辺]、[別海町]、[小樽市]、床譚[厚岸町]、トコタン [有珠山周辺]

(5) カムイ (神の)

カムイ (神) という言葉を含む地名は、地形が険しいなど人の容易に近づけないところ、通行が危険なところ、災害を起こす大きな自然の力が働く土地を示すと考えられる。

【例】

- カムイ・エトゥ (神の・岬) : 神威岬[浜頓別町]
- カムイ・コタン (神の・住むところ) : 石狩川[旭川市]、歴舟川[広尾町]ほか
- カムイ・ヌプリ (神の・山) : 摩周湖東南壁の活火山[弟子屈町]
- カムイ・ロキ (神の・座) : カムイロキ山[足寄市]

(6) ウェン (悪い)

人間が利用できない、又は人間に災害、災厄を及ぼすという意味を持つウェンという言葉を含む地名は、なんらかの災害履歴を持つ土地である可能性がある。

【例】

- ウィン・ナイ、ウェン・ペツ (悪い・川) : 雨煙内[雨竜町]、宇遠別川[陸別町]、植別川[羅臼町]ほか

- ウェン・シリ、ウェン・ピラ (悪い・崖) : 十勝川河岸[十勝地方]、上平[苫前町][尾平町]、手稲山[札幌市]ほか

(7) トウク (土地が隆起する)

河川の流路が変化する毎に土地が隆起したという意味を持つ。土砂流出が激しく河床が上昇傾向にある、あるいは地すべりが多く存在する河川流域を表す可能性がある。

【例】

- 徳富川[新十津川町]、突符川[乙部町]など

(8) その他

上述したもの以外にも、地名の由来等から災害との関係を示唆する地名の例を示す

- ライ・トコロ (死んだ・常呂川) : ライトコロ川[北見市] 地震に伴う河道閉塞で流路が変わってしまった古い常呂川
- ピウケ・ナイ (襲いかかる・川) : ピウケナイ川[旭川市] 水がどっと押し寄せてくる川
- ムカ (塞がる) : 無加川[北見市]、鶺鴒川[むかわ町] 土砂や結氷で川が塞がる
- ウナ・ペツ (灰・川) : 海別川[斜里町?] 過去に火山噴火により川が埋まった
- ウフィ・ヌプリ (燃える・山) : 樽前山[苫小牧市]
- プルプルケ・ヌプリ (震える・山) : 日和山[登別市]
- イェ・パロ・ヌプリ (火山灰の・口の・山) : 駒ヶ岳[森町ほか]
- イェ・サン (膿 (=軽石や溶岩)・出る) : 恵山[函館市]
- フラ・ヌ・イ (臭い・もつ・川) : 富良野川[上富良野町]
- クン・ペツ (危ない・川) : 群別川[石狩市浜益区]

3 現在の防災・減災対策への適応性に関する考察

現在の土砂災害・洪水・津波等の危険箇所や被害想定区域は、全国的に統一された一定の基準 (マニュアル書) を基本に地形図にシミュレーション結果を重ねて作成されていることが多い。

本章の冒頭で述べたように、アイヌの方々は、長年土地の自然と密接な生活を営んでおり、文字を持たないがゆえに、地名にその土地に関する情報を共有させ、子孫に伝えるということがなされてきたと考えられる。そのような地名の意義の中には子孫を自然災害から守るということもあったと考えている。

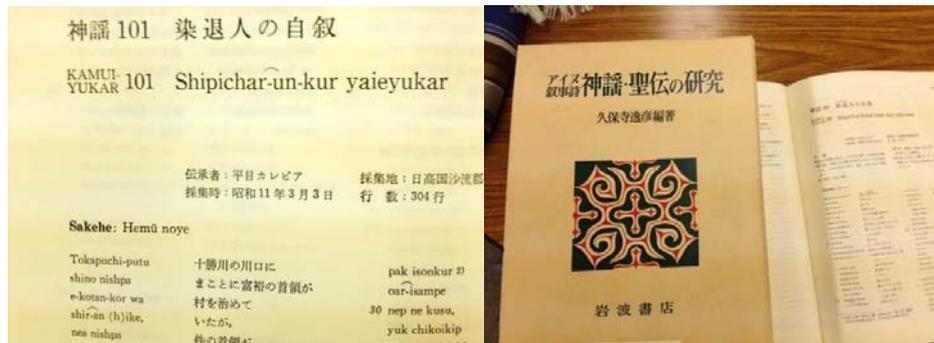
従って、地域毎の防災計画やハザードマップ作成に際しては、地元の図書館や郷土資料館等に保管されている郷土資料等から、今一度、自分の住んでいる土地の地名の由来を調べ、その中にどのような情報が込められていたのかを確認しておくことが望まれる。そして地名から推察される過去の災害現象に対しての警戒避難を心がけることが、地域防災上、住民が自らの命を守るうえで、必要なことであると考えている。

Ⅲ. 大規模災害に関するアイヌ伝承

1 調査方法

大正時代から昭和初期にかけて、アイヌ伝承の学問的研究の祖を築いた言語学者の金田一京助は、「神々のユーカラ（筆者注：アイヌ口承文学の一形態）は、日蝕・洪水・噴火・地震・海嘯・暴風雨・悪疫・不意の禍因などに係わる説明、その他（中略）その生活の指針を与える数々の神話を構成している」「いかなる荒唐無稽な口碑でも、それが以前の忘れられた生活の一端を漏らす貴重な史料である」とし、「その起源を、村に山津波や地震、噴火等があった時に村長が巫女に語らせた神託が敬虔に記憶され今日に蓄積されている」としている。すなわち、アイヌ伝承は自然災害の発生と深い関係があることが示唆されており、実際にそのような伝承を多く確認することができる。

本調査では、既存のアイヌ伝承の記録・研究に関する文献のうち、北海道大学アイヌ・先住民族研究センターの研究者の助言・協力を踏まえ、金田一京助氏、久保寺逸彦氏、更科源蔵氏らの著書及び北海道庁によるアイヌ民俗文化財調査報告等の既存文献を主な調査対象とし、大規模災害との関連が推測されるものを抽出・整理し、伝承が示す具体的な現象に関する考察を行った。



写真Ⅲ－1 調査に使用した文献の例

2 調査結果

本調査では、金田一京助・久保寺逸彦・更科源蔵らの著書から大規模な災害に関すると思われる記述を抽出し、そのうち代表的と思われる 20 事例について次の 7 つの事象に分類して整理した。

- | | |
|-------------|------|
| ・「山津波」 | 4 事例 |
| ・「河道閉塞」 | 3 事例 |
| ・「山崩れ・地すべり」 | 4 事例 |
| ・「洪水」 | 2 事例 |
| ・「津波」 | 3 事例 |
| ・「地震」 | 1 事例 |
| ・「火山噴火」 | 3 事例 |

以下に、現象毎にそれぞれ記述する。

(1) 山津波に関する伝承

金田一らはアイヌ語のオキムンペ (o-kim-un-pe 或いは o-kim-um-pe 「山からくるもの」の意) を山津波と訳しており、金田一らの記録している伝承の文脈から、この言葉は大小の規模を含む土石流や鉄砲水の意味であったことが推察される。

山津波に関する伝承は日高地方の記録に多く抽出される。これは近代のアイヌ文化研究の多くが日高地方をフィールドとして行われていたことが関係していると考えられるものの、本地域は日高山脈を擁し、国土交通省らによる深層崩壊の発生頻度が「特に高い」とされている地域であることは留意すべきである。

以下に山津波に関する伝承の例を示す。

【沙流川の山津波－「アイヌラックルの自叙」より】

(概要)

沙流川の上流の大沼に棲む大アメマスが飢餓を起こして人間を苦しめていたため、アイヌラックル(文化神)が、大格闘の末に大アメマスを退治したが、意図せずに大沼を決壊させてしまい、激しい山津波が起こって川下に流れ下った。そのため養姉から「せっかく人間の村を飢饉から救っておきながら、どうして村を壊すようなことをするのか」と窘められた。

(考察)

本伝承は日高地方に伝わる代表的なオイナ(古伝)の一つであり、同地域では、「大アメマスの棲む沼が日高山脈の分水界にあり沙流川と十勝川に沼が溢れて大洪水が発生した」等、多くの類話が伝えられている。沙流川源流部の山々には現在、沼は確認されないが、最高峰の幌尻岳(標高 2,053m)等の山頂付近には氷河地形のカールによる平坦面が存在する。オキムンペの言葉は広く河川洪水や谷の出水の意味も含めて使われていたことが伺える例もあるものの、伝承中に「村を壊す」という表現が含まれていることから、過去に沙流川で大規模な山津波が発生し集落に被害が生じたことを示唆していると考えられる。

なお、湖中に棲む大アメマスが地震や山津波、山体崩壊等の災害を起こすとする伝説は洞爺湖、支笏湖、屈斜路湖、摩周湖にみられ、これらはそれぞれ有珠山、樽前山、アトサヌプリ、カムイヌプリ等の活火山に接し地震や火山活動の活発な地域である。すなわち、アイヌ伝承において大アメマスが棲むとされる地域は、地震・火山活動等に由来する自然災害の多発する地域であったことが推察される。

【海嘯と山津波－「兎の自叙」より】

(概要)

兎がある人間の村に行って「恐ろしい海嘯と激しい山津波が一緒に来襲しようとしている、高い所に逃げろ」と告げたが、村長は村人に命令し兎を追い払わせた。兎は次にオキクルミ(英雄神)の村に行って同様に告げると、オキクルミは兎に恭しく礼拝し感謝の言葉を述べた。しばらく後、村々を海嘯と山津波が同時に襲い、避難していたオキ

クルミとその村人のみが助かった。

(考察)

日高地方に伝わる伝承である。この伝承における「海嘯」はアイヌ語のオレブンペ (o-rep-un-pe「沖からくる水(もの)」の意) を訳したものであり、現在の津波に高潮を含む言葉である。北海道では沿岸部を中心にオレブンペに関する伝承も数多くみられる。日高地方は地震活動の活発な地域であるとともに、地質堆積物から過去に幾度も沿岸部への大規模な津波の来襲があったことが推測されており、また本伝承は山津波と海嘯の同時襲来を伝えた者が老婆の巫女、カワガラス、バツタと文献に抛り変化するが、多くの類話を持つことから過去に津波と山津波がほぼ同時に発生した可能性はあると考えられ、異なる形態の災害の同時襲来に注意を促す伝承であると考えられる。また、本伝承と同様、動物の異常行動に注意を払うことを防災知識として後世に伝えるものと推察される伝承として、キツネ、カッコウが山津波の来襲を伝えたという伝承もみられる。

なお、オキムンペとオレブンペについては、山津波をオレブンペという言葉で表現した伝承者の記録がある等、必ずしもその分別が確実に固定化されている概念ではなかったことが伺える。一方、内陸部において津波が発生・到達したという伝承(例として、天塩川中流域の名寄市・美深町境界にある函岳に伝わる伝説、石狩川中流域の新十津川町・浦臼町に伝わる伝説)があり、この場合のオレブンペについては山津波を意味する可能性もあると考えられる。

【静内川の山津波―「染退人の自叙」より】

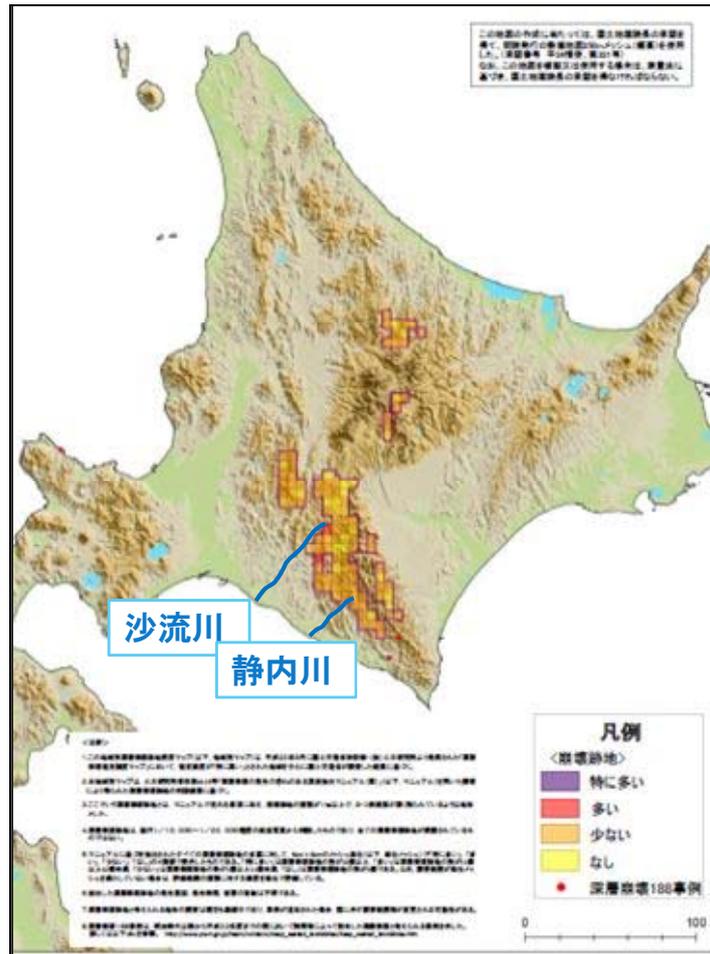
(概要)

日高地方静内川沿いの村の人が、夢の中で川の上流の神々から「静内川の水源に棲みついてしまった河童の神を追い出すので、2、3日は誰も川に近づかない様にする」と告げられた。

しばらく後、雨も降らず風も荒れないのに激しい山津波が起こり、ものすごい土砂崩れが押し下ってきた。お告げを信じず川に近づいた人は流されて亡くなった。

(考察)

静内川の上流域も深層崩壊の発生頻度が高い地域に含まれており、比較的土砂濃度の高い山津波及び被害の発生履歴を伝える伝承であると考えられる。さらに、山津波は好天時に突然発生する可能性があることを教訓として伝えていると考えられる。



図Ⅲ－１ 深層崩壊跡地密度マップと沙流川・静内川の位置
 (出典：国土交通省・一部加筆)

【融雪期の氷の山津波－「オキムンベのウエペケレ」より】

(概要)

ユーベツ村(胆振地方鶴川の支流にある地名)に住む夫婦の夫は、同居する妻の母親から「泥が詰まった雪の玉が落ちてきたら山津波が来る」と教えられていた。早春に川の上流から流れてきた雪玉を割ると中に泥が詰まっていた。夫婦が老婆に命じられ高台に避難すると、暴風雨があり深夜に氷がぶつかって流れる音がした。夜が明けたら川は全部氷で埋まり、村も全て氷の下敷きとなっていた。

(考察)

北海道においては河川の結氷期に、特に急激な気温上昇や降雨という気象条件下で、アイスジャム(河川中に蓄積した氷)による河道閉塞及びその決壊という現象の事例が記録されている。本伝承は、このアイスジャムによる河道閉塞、或は地すべりとアイスジャムによる複合的な河道閉塞の決壊より集落に被害が発生したことを伝える伝承と考えられる。

(2) 河道閉塞に関する伝承

伝説中に直接的には山津波（オキムンペ）が発生したとは述べられてはいないものの、何らかの要因による河道閉塞の発生、さらにその決壊による被害の発生が推測される伝承の例を以下に示す。

【神居古潭（石狩川）】

(概要)

昔、神居古潭に棲む凶悪な鬼神が石狩川に大岩を投げ落として河道を堰きとめたため、上流のアイヌが溺死しそうになった。これを見ていたヌプリカモイ（大雪山の神・熊）が一部の岩石を破壊し、危うくアイヌ達は助かった。怒った鬼神はヌプリカモイに掴みかかったが、そこに現れたシャマイクル（英雄神）が鬼神と大格闘の末、首を切り落とした。鬼神の首や胴体等が岩に変化し今も神居古潭に残っている。

(考察)

上川地方に伝わる、石狩川中流部の狭窄部である神居古潭の河道閉塞を想起させる伝承である。当地域の地質を構成する神居古潭変成岩類には地すべりを起こしやすい蛇紋岩が含まれており、過去に河道閉塞の発生に結び付く現象が発生した可能性はあると考えられる。

【西別川】

(概要)

根室地方の西別川がある朝突然干上がっており、村人達は地震の前触れか山津波かと騒いだ。川上に行ってみると、狭窄部に大木の様な怪魚が横たわって川が塞き止められ、よどんだ水が満々と広がり沼となっていた。怪魚の堤が切れたら下流の村に洪水が発生するとして村から村へと急使が飛び、川辺のアイヌが山の上に逃げる頃、水は恐ろしい唸りをあげて峰を砕き樹木を押し倒して流れ下った。

(考察)

道東地域に伝わる伝承。西別川は、摩周湖や活火山であるカムイヌプリに隣接する西別岳を源流としてほぼ東向きに流れ根室海峡に流入する河川である。地質的には約1,000年前までのカムイヌプリの噴火等による脆弱な第4紀火山噴出物に覆われており、本伝承は、過去に本地域において河道閉塞及び決壊による災害の発生があった可能性があることを示すものと考えられる。

【千歳川】

(概要)

石狩川支川の千歳川の災害に関して複数の伝承が見られた。

- ① 昔、千歳神社の傍らにあった山が、洪水のために流れて海へ出て利尻島（或は焼尻島、礼文島）になった。
- ② 昔、千歳神社の傍らにあった山が、大津波のために流れて馬追山にぶつかってから石狩川に沿って北の方に流れていき、海へ出て利尻島になった。
- ③ 昔、支笏湖の水があふれて洪水になり、千歳にあった山が押し流されて海に浮か

び、礼文島になった。

(考察)

これら伝承は文献では日本語訳のみの記述でありアイヌ語での表現は不明である。

いずれも千歳川に接する山の崩壊・流出現象があったとして、その原因は①、③では洪水、②では津波とされているが、前述のとおり伝承上の洪水と津波と山津波（土石流）は現象上の厳密な区別は出来ない。また、石狩川の河口を經由した流出土砂によって利尻島等の日本海の島嶼が生成するということは言葉通りに捉えてしまうと科学的な信憑性は低く、他の伝承にも見られる典型的・誇張的な表現と考えられる。これらを鑑みながら、これらの伝承において共通する事項となっている千歳川での大量の出水の発生及びこれによる山地の崩壊・流出現象の可能性について推測してみる。

千歳川上流部には支笏湖及び活火山樽前山と恵庭岳が存在する。樽前山は1667年と1739年に大規模噴火を起こしており、この時には支笏湖及び千歳川の河道に火山噴出物や山体崩壊さらには流木の供給があったと考えられる。また、支笏湖から千歳川へ流入する部分の狭窄部にはネッソウ（寄木の滝）、またその下流にはトイソウ（土の滝）という河道閉塞を想起させる地名がある。これらを踏まえると、例えば流木による支笏湖のダムアップと決壊、あるいは山体崩壊による支笏湖に発生した段波により千歳川において大規模な出水現象が発生し、河道に隣接する山地の崩壊・流出することにより、広域的に影響を及ぼす災害現象が発生した可能性はあると考えられる（現地調査結果はIV（1）を参照）。

（3）山崩れ・地すべりに関する伝承

【鷓川】

(概要)

鷓川の中流域には、山崩れや地すべりに関係する伝説が確認された。

- ①鷓川の上流に大崩れと言われるところがあり両方が切り立った岩山に挟まれたところがあるが、非常に蝮が多く蝮の匂いが漂っているのでエラミウンナイ（魔物のいる川）と言われた。昔、北見の湧別地方から穂別部落の豊かなのを聞き、野盗の一隊がやってきた。するとエラミウンナイの岩の上に子供を背負った女神が赤い布で鉢巻をして踊っていて、急に両岸の岩が崩れ野盗はことごとく埋められその塊が蝮になったという。
- ②昔、国後に蝦夷乱があった時のことであるといわれるが、胆振の部落の代表者を一人ずつ勇払に集め、釣天井で殺したことがあった。そのときそうした謀略があるとは知らずに、穂別町のルベシベのところよりも上流の人たちが舟で川を下ってきたところ、急にルベシベのところの山の岬が川の中にせり出してきて船を通さなかったので、助かったと云われ、今も忘れずにこの岬に感謝の祈りと酒を捧げている。

(考察)

鷓川の中流域には地すべりや斜面崩壊を起こしやすい蛇紋岩等からなる神居古潭変成岩類が分布しており、これらによる災害や地形の変化を伝える伝承と考えられる。

【屈斜路湖】

(概要)

屈斜路湖に昔巨大なアメマスが住んでいて、湖を渡る舟を覆して人を溺れさせていた。あるときアイヌの英雄オタシトシクルが、アメマスを退治しようと銚で目玉を突いたところ、アメマスが必死で大暴れたため、銚の柄の縄を結び付けていた山が抜け湖の中にくずれ込んでしまった。アメマスは山の下になって動けなくなったが、その山が現在の中島であり、山の抜けた跡に水がたまっていたのが奔渡（小さい沼）であるという。現在でもこの地帯で時々地震が起るのは、山の下になったアメマスが、まだ死にきれずにあばれるから起る。

(考察)

幌尻岳の山津波の伝承と同様に、地震や山津波などの大規模な災害は大アメマスに由って起こされるとする伝承が多くみられる。すなわち本伝承は、地震等によって過去に屈斜路湖の周辺で山崩れが発生したことを示唆するものであると考えられる。

【函岳】

(概要)

美深町等から眺められる函岳の頂上の近くには、昔大きいアイヌコタンがあった。ある年のこと物凄い山鳴りがしたのでアイヌ達は麓に近い所に避難したが、丁度その時長い旅から帰って来た若者が、母親が山のコタンに残っていると聞き旅姿で山に登って行った。若者が頂上のコタンに着いたと思われた頃、物凄い天地も砕けるような山鳴りと恐ろしい地震が何十回も続き見る見るうちに山客が変わり、山の姿が箱をいくつも積み重ねたように変わってしまった。

(考察)

函岳において過去に、山の形が変わるほどの大規模な山崩れがあった可能性を示唆する伝承であると考えられる。

【シュマルペの雷神】

(概要)

雷神が人間の村を見に、沙流川を上流に向かって天を進んでいった。川の中州の村長は村人に謹み畏れるよう命じ、村人も応じた。その上流の村でも村長はそのように村人に命じたが、村長の娘と息子が不遜な態度を取った。雷神は怒って神駕から焰の虹と岩の雨を降らせ、村は焼けた柱のみが残り地に住む虫さえも殺しつくした。

(考察)

沙流川の中流部、振内地方より上流にシュマルペという巨礫が散乱する場所の由来を述べた伝承と言われる。集中豪雨による山崩れや落雷による火災が過去に発生したことを示唆するものである。

(4) 洪水に関する伝承

【声問川の大洪水】

(概要)

稚内の声問川筋にチトカンウシという山がある。吾々が射た山という意味であるというが、昔、大洪水があつて、二日二晩この地帯一面濁流に洗われ、附近のアイヌ部落がほとんど全滅し、この山も僅かに頂上の部分だけが水から出ていたので、一人のアイヌがそれを見て、その山頂めがけて毒矢を射かけたところ、矢が山頂に命中し、たちまちのうちに大洪水がひいたという。

(考察)

稚内地方においても過去に大洪水があつた可能性があることを示唆する伝承であると言える。

【上川地方の大洪水】

(概要)

神居村台場ヶ原の北側に突き出ている断崖に屹立している岩の上をアイヌは「ホトイパウシ（呼ぶ場所）」と呼ぶ。大昔まだヌタツプカムシユペヌプリ（石狩岳）が隣のオプタテシケヌプリ（十勝岳）と共に盛んに噴火していた時代、上川の大平原に大洪水があり、ホトイパウシに避難していたアイヌ達が川向の嵐山や近文山に逃れた一族の安否を心配して大声で呼び合つて無事なことを確かめたことからこの名が出たという説がある。

(考察)

上川地方で大規模な洪水があつたことを示唆する伝承である。

(5) 津波に関する伝承

【鶴川の地獄穴】

(概要)

富内線が鶴川から日高線に分かれて間もなくウコトイというところがある。昔は山つづきであつたが、或るとき大津波で山が切れてしまったので、そのときここにあつた大きな部落が流されて全滅してしまった。このウコトイに洞窟がありあの世に通ずる穴だと言われていたが、鉄道工事のために崩された。

(考察)

胆振地方・日高地方は津波に関する伝説が多くみられる。また、この地域は地質調査により数百年毎に大規模な津波に繰り返し襲われている地域であることがわかっている。本伝承は、地形を改変させるほどの大規模な津波が過去にあつたことを示唆するものである。

【沙流川】

(概要)

①沙流川上にカピウというところがある。カピウとは鴉のことで昔大津波があつたとき鴉が海岸で巣を作らずこの川上に来て巣を作り雛を育て神様のお使いとして津波

があることを知らせた偉い鳥であると尊敬し、ココに来ると木幣を供えて祈るようになった。

②沙流川中流のオーコッナイと幌毛志との間の川向にある川に向って突出した岩をロクンデエトとって、昔、津波のとき弁財船がここまで押しあげられてひっかかり、岩になったのだ。

(考察)

津波など大災害の襲来前に動物が常時と違った行動を見せ、それを手掛かりとして助かったという伝承が複数見られる。また、②の伝承に見られる船のほか、山にクジラの骨が引っかかっているなど、津波の到達範囲の目印を伝えるためとみられる伝承も多数存在する。

すなわち、アイヌ文化に於いても何らかの異常の感知に寄り災害の発生や被災範囲を予測することが課題であったことが示唆される。

【三石・浦河】

(概要)

①昔津波があった時三石アイヌはサマンベ山に逃げ、幌毛の集落の者はサマッケ山に逃げた。高いサマッケ山に逃げた幌毛集落の者は、三石の集落の者が水に呑みこまれるのをみて「サマンベ（鱈）」みたいにバタバタしている」と笑ったので、それを聞いた神が大きな鱈を浮き上がらせて三石の人々を助け、波をサマッケ山に追いやったので幌毛の者は見る見る波にさらわれてしまった。

②浦河町姉茶の野深の川べりにあるポロイワとハライエチキキに昔それぞれ集落があり、或る時津波がこの地方を襲った時高いポロイワにいた人たちは安心し「団子を煮たドロドロした汁をまけたようにハライエチキキの連中が流れていく」と笑ったら、急に津波はポロイワの上の人々をさらって海に流しハライエチキキの人々が助かった。

(考察)

①、②とも日高地方に伝わる津波の話であるが、高いところに避難した住民が被災した住民を侮辱するような言動をした後に被災したというストーリーが共通している。災害時における利己的な言動への戒めも併せて伝える伝承であると考えられる。

(6) 地震に関する伝承

【支笏湖】

(概要)

大昔、支笏湖に大アメマスがいて暴れると島が揺れて地震になるので、オアイヌルシクルが退治しようとしたが、大アメマスに湖の中に引き込まれ死んでしまい妻と二人の子供を残して天に帰った。それを苦にして母親もまた天に帰ってしまって幼い姉と弟だけが残された。何年か経って姉と弟が力を合わせて大アメマスを退治しようとしたが、大アメマスは暴れて何日も経ち、姉弟は負けそうになってきたので天に向かって助けを求めた。すると父親が天から降りてきて姉弟を助け、やっとの思いで大アメマスを陸に引き揚げて刀で細々に切って湖に投げ込んだところ、それがみんな小さな普通のアメマ

スになって支笏湖では今日のように魚が豊富になった。

(考察)

支笏湖は恵庭岳、風不死岳、樽前山といった活火山に囲まれた火山活動が活発な地域である。特に 17～18 世紀は樽前山で大規模な噴火が発生しており、支笏湖周辺で地震が頻発していた時期があった事は十分に考えられる。

また、虻田地方では天や土の中等棲む大きなカジカが暴れることが地震の原因であるという伝承がある。地殻内のエネルギーを大きな魚に例えて伝えていたことが共通点であり、アイヌの方々の生活での魚との関係の深さを伺うことができる。

(7) 火山噴火に関する伝承

有珠山、十勝岳、駒ヶ岳等の火山噴火に関連した伝承も数多く残されており、その一例を示す。

【北海道駒ヶ岳に関する伝承】

(概要)

室蘭の岬の絵鞆という地名の村に住んでいた兄弟が、噴火湾の対岸に移ろうと船を漕いでいると、突然駒ヶ岳が爆発し噴出した軽石が海上に浮かんで船を動かすことができなくなった。兄弟の一人がシャチの神に祈ると、海の底から船を担ぐように走りだし、国縫と黒岩の間の海岸に着くことができた。

(考察)

北海道駒ヶ岳は、1640 年、1694 年、1856 年、1929 年に火砕流を伴う大規模な噴火が発生しており、これら噴火の際に、大量の軽石が降下あるいは流出し、海上に浮遊したことを示す伝承であることが推測される。

【有珠山の噴火】

(概要)

- ①昔、トコタンという村が今の虻田の築港あたりにあったが、有珠山の泥流で全滅した。
- ②有珠山の噴火で有珠の村は全滅したが、虻田から長万部方面へ逃げた人々だけが助かった。村に残って祭壇に向かって祈り続けた村長は、火に焼かれて灰になったまま座って動かなかつた。噴火が治まって長万部方面から戻ってきた人々が村長に声をかけ手を伸ばすと、灰になった村長が崩れた。

(考察)

最近では 2000 年に噴火した有珠山は、数十年というサイクルで活発な噴火を繰り返している活火山である。有珠山周辺の村が高温の火砕サージ等で大きな被害を受けてきたことが伝承で示されている。

【十勝岳の熱泥流】

(概要)

ある年に十勝岳が大爆発を起こして盛んに火を噴き溶岩を飛ばし、熱泥の流れは大海嘯を起こし、木石の区別なく押し流した。泥の海はカムイコタンにせまり堅い岩石を突

き破って流れ、現在のような平野が生成した。この際にアイヌの祖先達は高いところに逃げ続けたが、多くは死滅した。この大洪水の災厄を忘れないように、祭祀のたびごとに十勝岳のウポポ（主に円座を組んで歌われる歌）を神に捧げるようになった。

（考察）

十勝岳では大正 14 年噴火の際に大規模な融雪型火山泥流が発生して美瑛町・富良野市に流下し、当時入植していた和人を中心に死者行方不明者 144 名という大きな被害が発生している。この伝承は、大正時代以前にも十勝岳において大規模な泥流が発生したことを示していると考えられる。

3 現在の防災・減災対策への適応性に関する考察

抽出した伝承について防災面から解釈していくと、アイヌの方々は自然災害に対して以下のような概念を持ち、英雄伝説の様な物語に込めて後世に伝えようとしていたと考えられる。

○自然災害は、人間以上の力を持つ様々な神や魔神の振る舞いで引き起こされるが、必ずしも故意、悪意ではない場合（不注意など）もある。

○前兆現象（川が突然干上がる、動物の異常行動等）に注意を払い、神や年長者からの警告に従い避難することで命が助かる。

○利己的な行動をとる者への戒め

伝承には誇張的な表現や比喩的な表現も含まれている場合もあるが、聞き手側の印象を強くし災害記憶の消失を防ぐために工夫されてきたものと想定される。

東日本大震災を踏まえた現代の我々の防災・危機管理への対応として、上記のような伝承を「荒唐無稽」として排除するのではなく、その地域の地形地質等の特性を鑑みた上で、過去の大規模な災害履歴を探る手がかりとすることは、可能な限り「想定外」を少なくしていくために意義が大きいと考える。

前段で抽出した 20 の事例については、本研究では時間的・予算的制約から現地調査や空中写真による検証は一部にしかできなかったが、伝承に表現されていると推察される大規模な災害をある程度説明できると考えている。

なお伝承の中には、異なる地域（たとえば十勝と石狩など）を舞台とした類似の伝承が見られる場合も見られた。これも基本的には誇張的表現の一つであり、災害教訓を自らの地域に根付かせるための工夫であったと考えられる。

IV. 現地調査

1 調査地域の選定

前章「Ⅲ 大規模災害に係るアイヌ伝承」において、山津波、河道閉塞、山崩れ・地すべり、洪水、津波、地震、火山噴火に関して合わせて 20 事例を挙げた。現地調査は、時間的な制約と予算の面から、これら 20 事例の中の内 2 事例を抽出することにした。

取り扱う現象としては、文献から抜き出すことのできた事例が多くかつ研究面や行政的な課題となっている山津波と河道閉塞とした。また、地域的に片寄らないように道東地方と道央地方から選定することとした。

その結果、「山津波」かつ「道央」として千歳川を、「河道閉塞」かつ「道東」として西別川において現地調査を行った。

以下に、それぞれの調査の方法と結果、さらに、それらを関連付けて大規模な土砂移動現象（災害）の可能性について考察した。

2 千歳川

(1) 調査の方法

現在の千歳市街地において、過去の大規模な災害の有無の可能性を検討するために、千歳川の氾濫が想定される区域において堆積土層を観察し、土石流や火山泥流により集合運搬されたと考えられる砂礫層の有無を調査した。

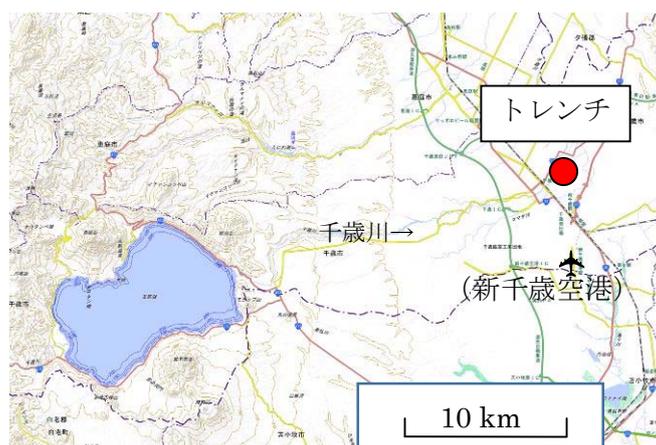
また、砂礫層がある場合には、その原因である土石流や火山泥流の発生年代を絞り込むために、その層内から木片を採取して放射性炭素年代測定を行うことにした。

一方、そのような土砂礫の集合運搬が可能な事象が、千歳川流域で起こりうる可能性を検討するために火山活動や山体崩壊等に関する既存文献の調査を行った。

なお、この堆積土層の調査は、千歳市建設部の理解と協力のもと、下水道管理設のために工事中のトレンチ掘削地を活用した。トレンチは深さ 3m 弱、幅 2m 程度である（写真IV-1）。その位置は、国道 337 号と千歳川に挟まれた道の駅「サーモンパーク千歳」（千歳市花園 2 丁目）の敷地内で、千歳川左岸から約 60m の地点である（図IV-1）。



写真IV-1 トレンチ調査（サーモンパーク千歳）



図IV-1 位置図

（2）調査結果

掘削地層の断面を目視で確認を行ったところ、地表から約1m付近までは整地に伴う敷土がなされていた。深さ1mから2.3m付近（層厚1.3m）までは降下火山灰を主体とした火山噴出物の層があり、深さ2.3mから下には円礫を含む不淘汰な礫層が確認できた。礫層は数cmから10cm程度が何層か重なりあって掘削底面以下まで続いており、今回の調査では全体の層厚を確認することはできなかった（写真IV-2）。

このような砂礫の堆積層が見られたことは、集合運搬、すなわち千歳川流域内で土石流または火山泥流が発生し、千歳川市街地で氾濫・堆積現象が起こっていたことを示していると言える。

また、砂礫層からは年輪が読み取れかつ人の手が加わっていないと判断される木片を6片採取することができた（写真IV-3）。この木片を用いて放射性炭素年代測定を行った結果を表IV-1に示す。測定方法は加速器質量分析（AMS）とし、分析前処理として酸-アルカ

リー酸洗浄を行っている。また半減期はリビーの半減期（5568年）を用いた。試料によりばらつきはあるものの、木片の運搬を伴う土砂移動が概ね17世紀後半から18世紀初頭にかけて発生していたことを示している。



写真Ⅳ－2 礫層



写真Ⅳ－3 採取した木片（Chitose05, 同06）

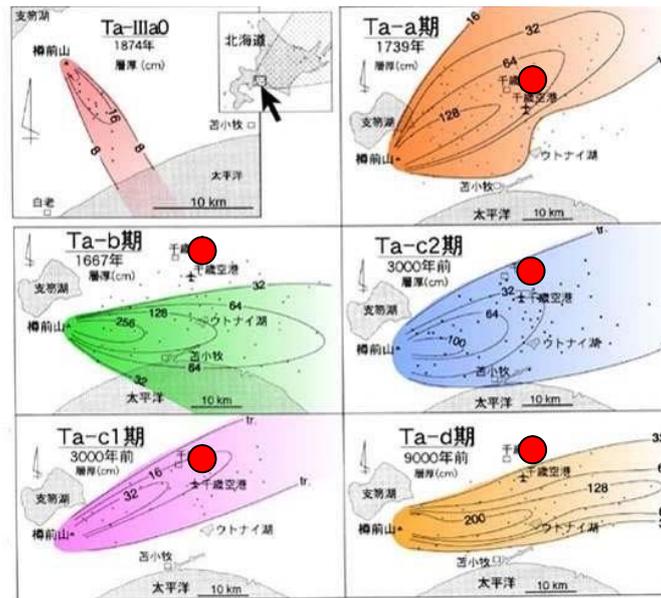
表Ⅳ－1 年代測定結果

| 試料名 | ¹⁴ C年代 (BP) | 暦年代 (2σ) |
|------------|---------------------------|---|
| Chitose 01 | 130 ± 30 | Cal AD 1670 to 1780 |
| Chitose 02 | 130 ± 30 | Cal AD 1670 to 1780 |
| Chitose 03 | 180 ± 30 | Cal AD 1655 to 1695 1725 to 1815 1835 to 1840 1855 to 1865 |
| Chitose 04 | 210 ± 30 | Cal AD 1645 to 1685 1735 to 1805 |
| Chitose 05 | 180 ± 30 | Cal AD 1655 to 1695 1725 to 1815 1835 to 1840 1855 to 1865 |
| Chitose 06 | 190 ± 30 | Cal AD 1650 to 1690 1730 to 1810 |

さらに、支笏湖の北西に接する恵庭岳の山頂東部には馬蹄形の爆裂火口（東西 700m、南北 500m）があるが、既存文献調査では 17 世紀頃の噴火の際に恵庭岳山頂東部が大規模な崩壊を起こし、山体の一部が東方に流れ下り、岩屑なだれ（ポロピナイ岩屑流）として支笏湖に流入していたとことが明らかにされている（中川ら 1994「後支笏カルデラ・恵庭火山の最新の噴火活動」火山第 39 巻）。なお、この爆裂火口を源頭部とするポロピナイ川では、昨年（2014 年）の豪雨時に土石流が発生し、国道橋を破損させているように現在も活発に土砂を支笏湖に排出している。

（3）考察

本調査地は樽前山の北東約 28km の位置にあり、樽前山噴火に伴う噴出物が卓越する地域である。樽前山ではこれまでの研究から約 9,000 年前、約 3,000 年前、1667 年、1739 年、1874 年に大規模な噴火が発生しており、それぞれ特徴的な噴出物の分布範囲が確認されている。それぞれの噴出物分布と調査地を重ねると、調査地において確認できた降下火山灰は 1739 年の Ta-a 層である可能性が高い（図Ⅳ-2）。これは、この層の下から採取した木片の年代測定結果とも整合している。すなわち、発生した年代が 1739 年の噴火かそれ以前の 1667 年の噴火の前後に発生したと考えられる。



図IV-2 樽前山噴火に伴う噴出物の分布と調査地（赤丸）
（消防防災博物館 Web サイトより）

次に千歳川流域における大規模な土砂移動現象（災害）の可能性について考察する。

調査結果で記載したように、17世紀頃に恵庭岳に岩層なだれが発生し、支笏湖に流入している。斜面崩壊による大量の土砂が水域に流入した場合、段波が発生し対岸等で大きな被害を及ぼした事例が北海道駒ヶ岳（1640年）や長崎県眉山（1792年）などで知られている。支笏湖においてもこの岩層なだれの発生時に、段波が発生したことが考えられる。

その場合、支笏湖の唯一の出口である千歳川においては、段波によって大量の湖水が支笏湖火口壁を乗り越えて千歳川に流出して、流下時に河岸の斜面を浸食・崩壊させ立木も巻き込みながら溪谷部を一気に千歳神社付近まで達し、その後現在の市街地周辺で氾濫堆積したものと考えられる。なお、その堆積した砂礫層は、その後の樽前山の火山灰によって覆われたものと推測される。

これらのことは、トレンチ地の地層調査で目視による堆積地層の状態や礫層の形成時期（17世紀後半～18世紀初頭）を考慮すると、土砂移動を伴う大規模な氾濫が発生していた可能性が十分にあると言える。しかし、そのメカニズムの詳細は未解明であり、今後は、支笏湖に流入した山体崩壊の規模を地形図解析や湖底の堆積度の調査を行いその規模の測定を行うとともに、発生する段波のシミュレーションを行うなどの詳細な検討が必要である。

3 西別川

(1) 調査方法

西別川は、北海道東部の西別岳を源流として、主に屈斜路火山や摩周火山の噴出物により形成された根釧原野と呼ばれる台地を東流し、野付水道に注ぐ河川である。

この河川には山本多助氏と更科源蔵氏が、それぞれ河道閉塞に関係すると思われる伝承を記録している。概要は以下の通りである。



図IV-3 位置図

- ①昔ある朝、西別川の川底が見えごく少量の水流しか流れておらず、アイヌ達は地震の前触れか山津波かと騒いだ。川上に走ってみると、川狭い場所に大木のような怪魚が横たわり川が塞き止められ沼となっていた。怪魚の堤が切れたら大変と村落から村落へと急使が飛び、川辺のアイヌが山の上に逃れる頃、水は恐ろしい唸りをあげて峰を砕き樹木を倒して川下へ川下へと流れてきた。大魚は摩周湖に落ちた大鹿を丸呑みにしたが、角のため腹を破られたらしい。その前後でも摩周湖へ狩り落とした熊や鹿が死んで西別川に流れ出るので、西別川は摩周湖が水源である。
- ②昔、摩周湖に大きなアメマスが住んでいたが、或る時湖畔へ一頭の鹿が水を飲みに来たところ、それを一呑みにしてしまった。その鹿の角がアメマスの腹に刺さってしまったので、アメマスは死んで土の下をくぐって、西別川の湧水池の出口にひっかかってしまった。そのため川の水が出なくなり、摩周の水が今にもあふれそうになった。そのことを鳥の神様である閑古鳥が部落の人々に知らせたので、上の部落の人々は、神に感謝して安全地帯にのがれたが、下の部落の人達は、神様の言うことをきかずに水源地へ行き、大アメマスを発見して大喜びでひっぱったため、アメマスがぬけて来ると同時に、おそろしい勢いで噴き出した水のために、下の部落の人も大アメマスも、洪水の渦に巻き込まれて見えなくなってしまった。この洪水のために、あたりのものが押し潰されたり倒されたりして、今のような平らな根釧原野が出来た。

摩周湖は、西別川の地形上の源流とされる西別岳より東方に位置する火口湖で、流入流出河川が無いが、水位が一定の範囲に保たれていることが知られている。

①、②では若干の違いはあるが、摩周湖が西別川の水源となっており、摩周湖の大アメマスが西別川の河道閉塞の原因としていることは共通している。

上記を踏まえ、現地周辺での文献収集調査及び地形踏査を行い、本伝承が残された背景について考察を行った。

(2) 弟子屈町図書館での文献調査

北海道弟子屈町が設立した弟子屈町図書館には、町を出身とする更科源蔵（1904-1985）が調査収集した資料が保存されている。今回、弟子屈図書館の許可を得て更科源蔵氏の記したアイヌ伝承調査に関するノートを開覧させて頂き、西別川の伝承に関する情報収集を試みた（写真IV-4）。

ここでは更科源蔵氏の直筆のノートをコピーし厚さ8cmのファイル約10冊分程度にまとめた資料を開覧した。更科氏が各地で聞き取りをした未発表の伝承が数多く存在することは確認されたが、目的とした西別川の伝承に関する記載は発見できなかった。

ただし、開覧できた資料は図書館が保管している資料の一部であり、これ以外に未整理の資料が数多く保管され専門家による調査が待たれている状況であること等、弟子屈町図書館司書の松橋氏より貴重なお話を伺うことができた。



写真IV-4 弟子屈町図書館所蔵の資料

(3) 地形踏査

西別川及び摩周湖周辺の地形踏査を行い伝承との関連について調査を行った。

西別川の流水は、西別岳山麓に根釧台地がつながる付近で大量に湧出する湧水によって供給されている。源流部の水域内に立てられた管の上部から湧水が噴き出していることから、河川水は被圧された状態で大量に湧出していることがわかる（写真IV-5中の赤枠）。



写真Ⅳ－5 西別川源流の湧水

この源流より下流の西別川を河口まで踏査したが、総じて火山灰質の台地を数 m の比高で開削した状況で流下しており、河道閉塞の発生可能性が高い比高差の大きい狭窄部等は発見されなかった（写真Ⅳ-6）。



写真Ⅳ－6 西別川中流部（長栄橋（別海町）附近）

流水部より上流の西別岳山麓は涸れ沢となっており、谷幅は広く崖地や裸地は見受けられなかった（写真Ⅳ-7）。



写真Ⅳ－7 西別川上流部（西別岳登山口付近（別海町））

伝承において西別川の水源とされる摩周湖の西岸から摩周岳・西別岳方面を眺めると、摩周岳山麓にあたる湖岸に、崩壊地が確認された（写真IV-8中の赤枠）。



写真IV-8 摩周湖岸から見た摩周岳と西別岳
(Adobe Photoshopにより明度を調整)

(4) 考察

①の伝承では、西別川の流水部の途中で河道閉塞が生じたとされているが、現地踏査をした限りでは山麓や河岸の崩壊により閉塞するような地形は確認されなかった。

②の伝承では、湧水口がふさがれて摩周湖があふれそうになり、その後一気に水が噴出したとされている。

摩周湖について長期的なモニタリングを実施している国立環境研究所によると、流入・流出河川のない摩周湖がほぼ一定の水位を保ち安定しているのは、標高 210.6m 以下では水が漏れないが、その水位を超えると一部の外輪山に水の通しやすい部分があり、そこから急激な漏水が始まるためであり、その漏水の一部は西別川源流部の湧水であることが水質組成の類似性から確認されている。

一方摩周湖は、約 7 千年前の大噴火により摩周カルデラが形成され、約 1,000 年前に摩周岳（カムイヌプリ）で大規模なプリニー式噴火が発生し山頂に直径約 1km の火口を形成したとされる（写真IV-9）。現在噴気活動は認められないが、摩周湖周辺では支笏湖と同じく地震活動が活発であった時期もあったことが推定される。このことが、「大アメマスが棲む」という支笏湖と共通した伝承を持つ由来であると考えられる。

地震等により外輪山に崩壊が発生した場合には摩周湖の水収支に影響を与え、②の伝承の様に西別川の湧水量の低下と摩周湖の水位上昇が同時に起こるという可能性が全くないとは言いきれない。いわば地下水脈の閉塞と呼ぶべき現象であろうが、このような現象の発生に関する知見の蓄積がないため、その発生可能性について言及することは困難である。

しかしながら、この西別川の伝承は、我々の現在の知見を越えた現象が存在する可能性があるという示唆を与えるものであり、意義深いものとする。



写真Ⅳ－9 摩周湖と西別川源流周辺のジオラマ
(川湯エコミュージアムセンター)

4 現在の防災・減災対策への適応性に関する考察

千歳川の千歳市街地における想定氾濫区域は、水源地を支笏湖にしているがゆえに急激な出水現象が緩和されていると考えられ、想定洪水氾濫区域は国道から下流の千歳川において川に沿った範囲にとどまっている。

しかし、地震や火山噴火の際に支笏湖を囲む恵庭岳などの支笏カルデラの火口壁が山体崩壊し、その土塊が支笏湖に突入した場合には、支笏湖湖面に段波が生じ、支笏湖の唯一の出口である千歳川に数回にわたって押し寄せ、千歳川に流出することになる。そのことで、千歳川の渓谷部の河岸を浸食・崩壊しながら立ち木を流木化しながら土石流的な形態となって千歳川下流の低平地に向かって流下したことが考えられる。すなわち、通常時には千歳川の急激な水位変化を防いではずの支笏湖が、火山噴火や地震によって火口壁の一部が山体崩壊した場合には防災上逆の現象を起こしてしまうことが考えられるのである。

このような事象はまれな事象と言えるが、地震や火山の噴火時には通常の危険区域の設定手法では表せない現象が起こる可能性があることを防災関係者は意識しておくことも必要と考えている。

V. まとめ

第Ⅰ章では、本研究の背景と必要性について述べた。

第Ⅱ章では、アイヌ語地名には、ピ、サツ（砂礫の流出）等、その地域の災害に関係する情報が内包されていると考えられる事例が多数存在することが明らかになった。このことは、今後地域の防災を考える上で一つの情報として有効であることを示したと考えている。

第Ⅲ章では、アイヌの方々が伝承してきた神話伝説から、山津波（土石流）や地すべり等の災害を表していると考えられる 20 事例を抽出し、災害形態を考察として整理した。

第Ⅳ章では、千歳川と西別川について現地調査し、伝承の一部についてある程度の説明ができる可能性があることが示唆された。これら第Ⅲ章及び第Ⅳ章からは、一見荒唐無稽に感じられる伝承であっても、現代の科学技術による解析を行えば、大規模な災害への危機管理の手掛かりになりうることを解った。

したがって、北海道の各地域での防災計画立案において、参考とすべき情報の一つとして、今後は次の 3 つの観点に留意して進めることを提案したい。

○アイヌ文化関連資料も含めて、郷土資料として図書館等に保存されている地域の地名や伝承の掘り起こしを行う

○地名や伝承から災害に関係すると思われる情報を抽出し、それを手がかりとした科学的な災害履歴調査を行う。（航空写真解析や土砂堆積層の面的調査等）

○上記の際には、防災関係部局と教育文化関係部局と連携し、たとえば遺跡発掘調査などにおいて合同調査を行う

これらの調査を進めるとともに、防災計画上重要な現象については、地形解析に加え力学モデルに基づく土砂移動シミュレーションを行い検証することによって、より広い範囲で精度の高い災害履歴の掘り起こしが可能となると考えている。

VI. おわりに

本研究は、文献による調査が中心となり、現地での地形や地質、堆積層調査が一部で実施できたただけであったが、これまでに述べてきたとおり、アイヌ伝承やアイヌ語地名表示を生かして、明治以前の災害履歴や災害危険箇所の手がかりをつかむことがある程度可能であることが示唆できたと考えている。

大規模な災害から地域を守るためには、広い範囲の多くの研究者の参加、特に社会科学

の分野との協力が不可欠である。

なお、一般市民の方々に対し、平成27年6月25日の「北海道大学時計台サロン」において本成果の一部を用いて啓発を目的とした講演を予定している。

本研究の一部は、北海道大学農学部4年鬼頭駿一君の「岩屑なだれの支笏湖流入による、千歳市街地の洪水氾濫予測に関する研究」として活用されている。

本研究が多くの参加者を得て継続されて、今後の北海道における災害危険箇所抽出調査や大規模災害に備えた危機管理の検討の参考になることを願っている。

VII. 謝辞

本研究を進めるにあたり、防災のためという研究の主旨から、多くの方々から多大な協力と支援をいただきました。

まず、本研究の構想段階から調査の実施に至るまで、国土交通省北海道局巖倉啓子専門官と当研究室の野呂智之特任准教授には惜しまぬ助力をいただきました。特に、巖倉専門官にはアイヌ語地名と伝承に関わる文献の整理に大変丁寧に対応していただき、また野呂特任准教授には千歳川の現地調査と地層調査に尽力をいただきました。まずここに記し感謝申し上げます。

そして北海道大学アイヌ・先住民研究センターの常本照樹センター長並びに所属の研究者の方々には、アイヌ文化に関し知識が皆無に近い著者に、調査の初期段階はもちろんのこと進行段階における的確で重要なご指導とご支援を頂きました。そのご支援ご協力により、本調査を続けることができました。また公益財団法人アイヌ文化・研究推進機構の高橋規氏からも貴重で適切な助言を頂きました。ここに記し深く感謝申し上げます。

また、現地調査におきましては、千歳川の堆積地層の観察に関して千歳市建設部の方々と工事施工者の方には、年末を控え下水道工事の工期が迫る中、工事を一時中断してまでトレンチ掘削された地層を観察・調査させていただき、第IV章をまとめることができました。

さらに、西別川の現地調査においては、弟子屈町立図書館の関係者の方々から文献調査への協力と更科源蔵氏直筆の記録帳など貴重な資料の閲覧を許可していただきました。

また、北海道建設部土木局河川砂防課と北海道開発局河川計画課及び千歳川河川事務所の担当官の方々には、大規模災害に関する調査報告書や地質調査報告書を借用させていただきました。

千歳川の大規模災害をテーマとして卒業論文に取り組んだ北海道大学農学部流域砂防学研究室4年の鬼頭駿一君は本研究の一部を担ってくれたほか、同研究室の院生・学生諸氏には炎天下の千歳川現地調査を手伝っていただきました。

いずれも本研究に関して大変貴重な資料を得ることができましたことに、感謝申し上げます。

主な参考文献

本研究の主な参考文献は以下のとおりである。

- ・山田秀三：北海道の地名 山田秀三長作集別巻 アイヌ語地名の研究 草風館
- ・公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構：アイヌ民族：歴史と歩み—未来を共に生きるために[改訂版]，p6，2014
- ・金田一京助：アイヌ語研究 金田一京助助選集Ⅰ，(株)三省堂，1960.
- ・金田一京助：アイヌ文化志 金田一京助助選集Ⅱ，(株)三省堂，1961.
- ・国土交通省・独立行政法人土木研究所：深層崩壊に関する全国マップについて，国土交通省報道発表，2010.
- ・久保寺逸彦：アイヌ叙事詩・神謡・聖伝の研究，岩波書店，1977.
- ・金田一京助：アイヌの神典 - アイヌラックルの伝説 - ，八洲書房，1943.
- ・北海道教育庁生涯学習部文化課編：「昭和 62 年度アイヌ民俗文化財調査報告書 アイヌ民俗調査Ⅶ（沙流川・十勝地方）」，北海道教育委員会，1987.
- ・更科源蔵：アイヌ関係著作集Ⅰ アイヌ伝説集，(株)みやま書房，1981.
- ・更科源蔵：コタン生物記Ⅱ 野獣・海獣・魚族篇，(財)法政大学出版局，1976.
- ・更科源蔵：コタン生物記Ⅲ 野鳥・水鳥・昆虫篇，(財)法政大学出版局，1977.
- ・吉川泰弘，秋山泰祐，山田知充，巖倉啓子：アイスダム決壊によるダム湖の流入流量の急激な増水，寒地土木研究所月報，No.689，2010.
- ・近江正一：アイヌ語から生まれた郷土の地名と伝説，上川地区学校生活協同組合，1954.
- ・山本多助：阿寒国立公園とアイヌの伝説，山本多助を語り継ぐ会，2003【1940 発行書の復刻版】.
- ・長見義三：ちとせ地名散歩，北海道新聞社，1976.
- ・北海道教育庁生涯学習部文化課編：昭和 63 年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗調査Ⅷ（鶴川・有珠地方）」，北海道教育委員会，1988.
- ・中川他：後支笏カルデラ、恵庭火山の最新の噴火活動，火山第 39 巻第 5 号，1994.
- ・勝井他：「北海道の活火山」 北海道新聞 2007
- ・国立環境研究所：摩周湖長期モニタリング観測結果，国立環境研究所 HP